

幕府に対して、同年の五月には小倉藩の窮状を訴えて、一万石の救援米を嘆願した。この訴えは、結局幕府の受け入れるところとはならなかった。このように、小倉藩は藩体制の再建に取り組んでいたが、中央の政治情勢は大きく変わろうとしていた。

第三節 明治維新後の小倉藩

一 維新政府の諸政策と小倉藩

大政奉還

十四代将軍の後を継いだ徳川慶喜は、慶応三年（二八六七）十月十四日に朝廷に対して政権の返上を奏上した。同日、薩摩藩主・長州藩主に対しては、討幕の密勅が下されていた。大政奉還という路線は、将軍を議長とする列藩会議を開いて政治を担当するものであり、討幕はまさに徳川慶喜を討つものであった。当時の主だった藩が考えていたものは第8表のようなものであって、実に政治勢力と情勢は複雑なものになっていた。

朝廷は十月十五日大政奉還の奏上を受け入れ、同時に一〇万石以上の諸大名に京都参集を命じ、一〇万石以下の諸大名にも同じ命令を発した。だが、京都の形勢を見て諸大名は、諸藩主らは容易に上京しなかった。十月までに上京したのは、大藩では薩摩・越前・尾張・芸州・彦根藩主らであった。そのほか、京都付近の

小藩主らの十数藩であった。かえって、譜代溜問詰め以下の諸大名七、八十藩主は幕府に対して、幕命がなければ朝廷の命令にしたがわれない考えであるがどうかと問いただす有り様であった。紀州藩の重臣にいたっては、徳川氏の恩誼を捨てることは出来ないとかくまで幕府に対して忠誠を尽くそうと考えていた。

その一方、水面下では両勢力の暗躍がみられ、十二月九日を迎えた。そして、「王政復古の号令」が発せられた。まさに、八月十八日の政変と同じくクーデターが行われ、結局薩摩藩・長州藩を中心とする討幕派が政権を奪取することになったのである（第8表参照）。

戊辰戦争と小倉藩

十月に、小倉藩も藩主の上京を促さ

第8表 慶応三年段階の主な政治勢力

政治勢力	その方針
外国勢力	英国……………薩長などの雄藩支持 仏国……………幕権強化政策
宮廷勢力	天皇……………無色、したがって、玉を手中にしようとする勢力が必死の工作を行う対象になる 公家……………討幕派（岩倉具視を中心とするごく少数、王政復古派と組む）、王政復古派（大部分は腰のすわらない反幕派）、佐幕派（＝公武合体派、上層公家に多い）、無関心派（多数）
幕府勢力	將軍（徳川慶喜）・側近……………幕権強化、幕府独裁制の修正を考えている。 幕権強化策派……………親仏派を含む多数派 開明派……………大政奉還に近い考え方、少数派 無関心派……………多数派
雄藩勢力	長州藩……………武力討幕 薩摩藩……………武力討幕が基本路線、大政奉還の選択も可能性あり 土佐藩……………大政奉還路線、一部に討幕派 芸州藩……………薩摩藩と土佐藩の中間に位置づけられる 宇和島・越前藩……………土佐藩に近い、より佐幕的 会津・桑名藩……………幕権擁護＝佐幕の色彩が強い 無関心派……………内部で抗争や事情があつて動きが鈍い
民衆勢力	「下民の蜂起」に対し、大政奉還派がいちばん心配したほど、内戦による動乱を避けたいと考えられた。全体として、封建支配に対抗するエネルギーを持っていた。

（中央公論社刊『日本の歴史』十九巻四六六～四六八ページ）

れたが、藩主の幼少を理由にこれを断った。翌慶応四年（一八六八、九月八日明治と改元）に鳥羽・伏見の戦いが開始され、明治二年の五月までのいわゆる戊辰戦争が行われた。この戦いで、名実ともに江戸幕府は倒れ、新政権の全国統一が実現した。新政府はこの後、天皇を中心とする中央集権国家の樹立を目指して、同年には版籍奉還、明治四年（一八七二）には廢藩置県を断行した。

一月十日朝廷から、小倉藩に対して鳥羽・伏見の戦い後の討幕に国力相應の人数を差し出せとの通達があった。この命令を実行するため、部隊の編制をすべく準備をした。郡夫の徴集も必要となり各手永から七人の割り当てで徴発をした。当時の小倉藩の兵力は、備頭八人、隊長五二人、役々五六人、銃隊二六五五人、大砲二九門であった。この中から、臨時に編制をした部隊は二月六日と、二十一日、二十七日の三回に分け、備頭（重臣）一人、隊長一四人、銃隊四〇〇人、それに付随する諸役や家来、郡夫が上京した。

このように出兵したが、小倉藩には軍事的な役割は与えられなかった。そこで、家老の鳥村志津摩が上京して、朝廷に忠誠を誓う口上書を提出して働きかけることによって、関東での戦いに参加することを得た。また、朝廷が万石以上の大名に一万両の貸与を表明していたので、財政窮乏を理由に二万両でもいいとの申し出をし、七月にはようやく一万八〇〇〇両の拝借を実現した。

新政府は、奥羽列藩同盟を潰すため出兵の動員をかけた。小倉藩は、八月二日大坂警備にあたっていた藩兵五〇人が越後に向けて出動した。この時、新たに領内から七〇人の軍夫を徴募して同行させた。八月十七日には二八〇人の藩兵が杵尾浦から出船して越後を目指し、九月一日には三五〇人の藩兵が香春に集結して奥羽へ向け出発した。この出兵には軍夫その他を加えると出陣人数はおおよそ一〇〇〇人を超えた。新政府

から借用した二万八〇〇〇両はまたたく間に費消し、八月にはさらに五万両の拝借を願わなければならなかった。そこで、余裕のなかった新政府であったが、小倉藩には一万両を下げ渡した。十月には、東北派遣軍の防寒具代一五〇〇両も調達が出来ず、やむなく軍務官に借用を願い出て、軍務官は一〇〇〇両を貸与するという有り様であった。だから、小倉藩としては八月の五万両の拝借は是非とも必要であり、執拗に新政府と交渉をした。その結果、十二月になってようやく二万両の拝借に成功した。

藩内でも当然財政緊急措置を講じた。小笠原一門と中老（家老職を出す家柄）は禄高五百石に統一、馬廻り役は二百石で頭打ち、書院番・近習頭・組付はすべて一五石四人扶持、組拔・足軽は七石二人扶持、中間は四石一人扶持に統一した。そして、節減した禄高米を軍資金に回した。

二 戊辰戦争と小倉藩兵

(一) 戊辰戦争

不安定な新政府

慶応三年（一八六七）十月十四日の大政奉還はけっして幕府の滅亡を意味しなかった。

同日、朝廷から薩摩・長州両藩に「討幕の密勅」が出されていたが、政権の帰趨は分かっていなかった。朝廷は、この大政奉還の申し出を契機に、一〇万石以上の大名に対して十一月中に上京するように命じた。またそれ以下の諸大名に対しては、京都に参集するようにとの勅命を出した。この時、京都の